

■（８０）お天気記事に必要な「心遣い」

竜巻や突風、急な強い雨、あられ、と天気につわるニュースが相次いでいる。竜巻で大きな被害を出した地域では、東日本大震災の被災地のよう、住宅や団地が壊された。身の安全を守るには、きめ細かな気象情報が欠かせないとあらためて実感させられる。

気象ニュースは、メディアの特徴が現れる。身近なエリアで今からどうなるかを伝えるのに力を発揮するのは携帯電話を含むインターネットか。まさに今なにが起きているかを映像で伝えられるのはテレビだろう。新聞は…。記者に成り立てのころ、浸水被害や大雨洪水警報発令中など目の前で起きている事象を原稿に盛り込もうとした。が、上司からの指摘ではとした。「読者が新聞を手にするのは明朝だぞ」。翌朝まで警報は続いているのか。もしかしたら台風一過のように晴れているかも。翌日の昼以降の天気は。結局、被害の拡大ぶりや翌日の天気予報をみながら、必要な情報を選び直すことになった。

相手がいつ、どこで読むかを考えながら書く大切さは普段の文章も同じ。送信したらすぐに相手に届くメールに慣れている子どもたちにも、その心遣いは知って欲しい。
(山)